



MATSUSHITA PEARL FARMS
The Story of
IRIS · PARURE

The Story of IRIS・PARURE

01 Prologue (はじめに)

02 Suddenly (突然)

03 Why? (なぜ…)

04 Challenge (挑戦)

05 Dyeing Act (染色行為)

06 Crisis (危機)

07 Birth (誕生)

08 Naturally (自然のままに)

09 Hope (希望)

10 Forever (永遠)

11 Epilogue (おわりに)

-01-

Prologue (はじめに)

真珠の養殖が本格的に始まって間もない1928年(昭和3年)、当時設立された大日本真珠組合の定款に「施術作業の年の十月より起算し、三年以上を経過しない真珠の浜揚げを禁止する」との旨が決議されています。そこまで真珠層が巻けば、当然のことながら真円状の真珠はほとんど無く、巻きすぎて形の変形した真珠がほとんどであったと想像出来ますが、さらに定款では、それらの巻きに巻いた真珠の中で「真円ナルヲ最上トシ…」と続いているのです。今から考えると、とても想像しがたい厳しい品質規制だと言えます。

それに対し、今の真珠製品のほとんどは6~8ヶ月という短期養殖で採れた真珠を、白い真珠を求めるあまり過激な漂白剤で漂白をして、さらには化学染料でピンク色に染めて、あたかもきれいな色をして巻き厚があるように見せかけています。

つまり言い換れば、もともと核が丸く真珠層も薄いので、出来上がった真珠も丸いままだから「一級品です」、過激に漂白し染料でピンク色に染めたから「花珠です」と、あたかも高品質な真珠であるかのように偽装しているのです。

このような化学処理を施した真珠は、短期間のうちに真珠表面の光沢が落ち、染料の退色により真珠が変色してしまう恐れがあります。なぜ先人達が築いてきたすばらしい真珠養殖の歴史に、泥を塗るようなことをしているのでしょうか。嘆かわしい限りです。

この物語は、真珠産業に携わる人々に今一度「真珠の原点」を見直して頂きたい
また真珠を身に着ける人たちにも、真珠に様々な色や形があるということを知って頂きたい
そんな思いを込めて、事実を基に製作しました。

そして同時に、このイリスパルーレを通じて世界中の方々に、日本本来の真珠文化と物作りの本質
が、今も一部で守り続けられていることを、少しでもお伝えできればと願っています。

-02-

Suddenly (突然)

1989年11月のある日、四国宇和島の宇和海に面したある真珠の養殖場で、浜揚げしているアコヤガイから直径が12.5mmもある大粒の真珠が突然ポツと生まれてきました。採取したのは、この養殖場を経営する松下明弘さん。

アコヤガイから採れる真珠は、大きても直径10mm程度が限界です。その真珠はそれまでの常識を遙かに凌ぐ、渾身の越物真珠^{*1}の一粒でした。

真珠は一般的に、淡水の貝殻を丸く加工した「核」と呼ばれる物質を貝の肉の中に入れ、その核を貝の「真珠層」が取り巻くことで真珠に育ちます。真珠層が巻けば巻くほど、その耐久性も高くなります。

つまり「巻きは真珠の命」なのです。

松下さんが越物にこだわるのは、越物づくりに要する歳月こそが、真珠本来の品質を保つために当然に必要であると考えていたからです。

*1 核入れから1年を越えて養殖する越物真珠づくりは、貝の斃死が多くなった現在では、リスクが大きく経費がかさむため、今ではほとんど行われなくなりました。

-03-

Why? (なぜ…)

1994年の5月、松下さんは東京で行われたある会社の展示会に、自分の真珠を出品するために上京しました。そこで彼は自分の真珠と一緒に並べられた、他の真珠加工メーカーのネックレスを見て、大変驚きました。

大勢のセーラーたちが、化学染料でピンク色に染め上げた、巻きの厚くない当年物^{*2}の真珠を「丸くてピンク色をした真珠がいい真珠です。花珠と言ふんですよ」などと言葉巧みに販売しているのです。

それに対し松下さんの越物真珠は、(真珠層がよく巻いているため)、軽微な歪みがあって、真珠層の厚さから自然な加工色にしか仕上がっておらず、丸くてピンクに染めた真珠と比べると見劣りがするというのです。

その展示会の担当者は「君のは値段ばかり高くて売れないじゃないか。売れる真珠が良い真珠だよ」と松下さんを一喝しました。

真珠は、当年物を越物と称して販売しても、見た目で品質を見極めるのは大変難しく、産地や製造工程の偽装品まで横行しているのが現状なのです。

*2 核入れから1年末満の養殖期間で採取された真珠のこと。
(一般に真珠の養殖期間は6~8ヶ月)

-04-

Challenge (挑戦)

大変なショックを受けた松下さんは、東京から帰って何度も何度も考えました。

「核が丸いんだから真珠層が薄ければ丸いままだし、ピンク色の染料で染めれば真珠もピンク色になるだろう…。あんな当年物の薄巻きの真珠や外国産のものを、いかにも高そうに売るなんて…?」

まじめに長い時間と経費をかけてよく巻いた 本物の越物真珠を作ろうと思っても、それらと同等かそれ以下で扱われ、やりきれない思いでした。

でも松下さんは、越物真珠を作ることを止めませんでした。

「そんなごまかしの仕事をしていたら、お客様に何の保証も出来ないし、とても申し訳ない!」と思ったからです。

そして「染料で染めなくても、虹色に輝く真珠を作ろう」と決心したのです。

こうしてアコヤガイとの、長い挑戦が始まりました。

-05-

Dyeing Act (染色行為)

それから程なくして「アコヤ真珠は変色するらしい」という噂が流れ始めました。

本来、宝石が変色するなどということは決してあってはならないことです。

基本的に真珠そのものの色は、ほとんど変化しません。

しかし情けないことですが、ほとんどの真珠はカーテンやシートなどを染めるのと同じ堅牢度の弱い化学染料で真珠を染めているため、その染料の退色により真珠全体の色が変わってしまったのです。

このことは真珠業界全体に、大きな暗い影を落としましたが、
残念ながら今でもその体質はまったく変わっていません。

-06-

Crisis (危機)

1996年の夏、追い討ちをかけるように、宇和島市周辺の真珠養殖場に大きな衝撃が走りました。

養殖中のアコヤガイが次々と死んでいくのです。松下さんの養殖場でも死んだアコヤガイから白化^{※3}した越物真珠が飛び出し、甚大な被害を受けました。

真珠養殖業者は、次々と倒産したり廃業してしまい、奇しくもとうとう松下さんの養殖場が、愛媛県で最も古い養殖場になってしまいました。

後になって分かったのですが、原因は病原性のウィルスでした。

四国の宇和海は、真珠養殖産業の存亡という深刻な危機に立たされたのです。

その後、松下さんたちは長年使ってきた漁場やアコヤガイなどの自然に敬意を表し「Forever Pearl Project」を通じて、海岸の清掃活動を始めました。

※3 サンゴのように真珠の表面が白くかぶれ、照りのなくなった状態。

-07-

Birth (誕生)

それでも松下さんは、真珠づくりを止めませんでした。

「病気に強い貝を作ろう!」と思い立ち、
真っ先にアコヤガイの品種改良の研究を始めたのです。

そして1997年のある春の日、海外のアコヤガイの仲間との品種交配をしていると、
普通の貝に混じって鮮やかな紅色のアコヤガイが育っているのに気が付きました。

これがまさに後の「ベニアコヤ®」の誕生の瞬間でした。

その貝は、成長するにつれて貝殻内側の真珠層が、非常に強い赤みを帯びた虹色
(干渉色)になって、とてもきれいな貝になりました。

®商標登録済み

-08-

Naturally (自然のままに)

ところで一般的に、アコヤガイから生まれる採れたての真珠の多くは、
黄色色素やシミを多く含んでいます。これらは何もしなくても自然に漂白が進むので、
色を安定させるための加工処理だけは欠かせません。

そんな中、2002年に松下さんは大学や愛媛県の支援を得て、光ファイバーによる新しいシ
ミ抜き処理技術^{※4}を開発したのです。

おかげでイリス・パルーレは、過激な漂白液^{※5}を使う他の真珠加工業者に頼らずに、独自で
最低限の自然な加工処理が出来るようになりました。

もちろん、化学染料などを使った染色は一切していません。

このような処理だけで十分に美しいのは
イリス・パルーレだけなのです。

※4 特許番号: 3980949

※5 現在ほとんどのアコヤ真珠は、数%の過酸化水素を含んだ処理液を使ってシミ抜き処理されていますが、
これを多く使って表面を傷めた真珠は、短期間で真珠表面の光沢が落ちて来る場合があります。

-09-

Hope (希望)

そうして1999年の冬、ようやくベニアコヤで初めての真珠が採れました。

それは、太陽光線のもとで赤みを帯びた虹色の干渉色をおしみなく反射する、
言葉では表せない程とても美しい真珠でした。

そうしてこの真珠は「イリス・パルーレ (IRIS-PARURE)」と名付けられました。

フランス語で、イリス (IRIS) は「虹」を意味し、
パルーレは真珠を意味するパリュール (PARURE) から付けられました。

着ける人に虹を架ける、とてもいい名前です。

-10-

Forever(永遠)

自らの信念を貫き、ひたすら真珠のあるべき姿を求め続ける松下さんは、
「ベニアコヤは海の神様からの授かり物です」と言って大切に育て、
今も虹の真珠「イリス・パルーレ」を作り続けています。

-11-

Epilogue（おわりに）

ここ数年間、巻きの良い真珠は採れなくなりました。もっとはつきり言うと作らなくなつたのです。海が汚染され病気が発生したりして、貝が途中で死んでしまう可能性が高くなり、事業として採算が取れない産業構造になってしまったからなのです。

その代わりに、巻きの良くない真珠を調色(化学染料でお化粧すること)する技術がどんどん進んでいきました。つまり、巻きが薄くてもきれいに見せることが出来るようになったのです。ですから、見た目で品質を判断することは本当に難しくなってきました。

しかしながら、人工的に着けられる色によって真珠が変色するのは決してよくありません。だからこそ「原点に戻って美しい貝から美しい真珠を産み出したい」という松下さんの思いがベニアコヤの誕生をもたらしてくれたのだと思います。

ベニアコヤの稚貝の孵化から越物養殖、製品づくりに至るまでの5年に渡る一貫生産にこだわった、ものづくりに徹底しているのは、松下さんの養殖場だけになっているといつても過言ではありません。

イリス・パルーレは年間で、ネックレスにして400本程度しか生産されないとても希少な真珠です。それは自然の力が産み出してくれるものなので、同じ色や形のものは一つとしてありません。世代を越えて虹色に輝き続け、幅広い世代のお客様に、末永くご愛顧いただくよう誕生した究極の真珠がイリス・パルーレなのです。私たちも、身につける機会を得たお客様とともに、喜び合えることを切に願っております。

MATSUSHITA PEARL FARMS

UWAJIMA JAPAN
since1953

URL : <https://iris-parure.jp/>

E-mail : info@iris-parure.com

初 版 2009年5月出版

第二版 2020年10月

2019年、愛媛県を中心に日本全国でアコヤガイの稚貝が夏場に突然大量死する問題が発生し、現在もこの被害は続いています。コロナ禍の真珠販売不振もあり、特に母貝の供給を愛媛県に頼る三重県では漁業者の高齢化も相乗し。規模縮小に伴う離職や廃業が増えていますが、松下真珠養殖場では、既にいち早くこの病気や環境変化に強いアコヤガイの開発をおこなっており、被害を最小限に止め、その一方で、「宇和海のピオーネ」とも称せられる12mmを超える巨大な真珠養殖技術を開発しました。

100年に一度の発明とも言われるこの真珠を、世界の人々に広げるとともに、この養殖技術を次世代に伝えることを、大きな目標に掲げています。